

特技キラリ 起業の勧め

定年後もまだまだ「現役」

「若い世代のために」原動力



出張先のフィリピンで現地の若者と交流するアットコンシエール社長の立木さん

立木さんの 起業までの道のり

- 10代** 「好きな英語を仕事に」と英語専門学校へ
- 東武の特急に乗務し外国人客を案内。「生きた英語を学んだ」
- 28歳** 出産で退社。専業主婦を経て派遣社員に
- 38歳** 米研究開発機関の日本支社の秘書に。交渉力を身につける
- 47歳** 「外資系と日本企業の違いを知りたい」と大学に入学
- 54歳** プラント会社で多様な国籍の社員と交流。「インド英語も得意になった」
- 64歳** 起業3年目。「いつか人材のあつせんもしたい」と夢は広がる

「自分の蓄積を若い人に還元したい」。人材関連会社、アットコンシエール

ル(東京・江東)を2013年に起業した立木晶子さん(64)はそう語る。事業内容は外国人の就労支援。中小企業がフィリピン人の研修生を受け入れる際のビザ申請などを請け負う。武器は会社員生活で身につけた英語力、そして人脈だ。

定年後は実母の介護をしていたが、人材関連の仕事をしたと東京商工会議所に相談。外国人のビザ取得や人材の紹介を事業の柱に据えて62歳で起業した。慢性的な人手不足が続く日本企業では外国人採用への関心が高い。「大企業は採用ルートができてはいるが、中小企業は手つかず。困っているところが多い」と見通した。

今年6月にはフィリピンに出張し、現地の人材会社や経済特区を視察。持ち前の行動力でネットワークを広げて帰国したばかりだ。「フィリピンは今後のアジアで一層の経済発展が見込めるし、知人も多い」と事業拡大

にもがせん力が入る。「大好きな英語をもっと勉強したい」と英語専門学校に進み、東武鉄道の特急列車に乗せていた車掌通訳に。その後動いた専門会社では英語での価格交渉や契約など輸出事業の基本と醍醐味を味わう。結婚・出産でいったん退職した1年半後には派遣社員として貿易実務などの仕事に復帰。38歳からは米研究機関の日本支社で役員秘書を務めた。そのかわら50歳前後の「アラフィフ」で放送大学も卒業している。

起業につながる転機は54歳の時だ。東南アジアでインフラ整備を展開するプラント会社に転職。アジアや中東などから集まった外国人と働く中、さまざまな英語を聞き分け、採用活動を通じて人材の多様性にも触れた。

別のプラント会社では技術者ら外国人社員約30人を束ねる管理職に就いた。「子どもが病気になった」「妻も日本で働きたいと言っている」「国勢調査の回答方法は？」――。フィリピンやインド、アフリカなどから来た社員の生活を親身にサポートするうち、家族同然の間柄になった。

モットーは「効率よく働き、残業はしない」と明快。ゆくゆくは現地の人材会社と組み、フィリピンの若者が日本で就労し、経験を積む機会を増やしたい。そんな使命感を原動力に奔走する。